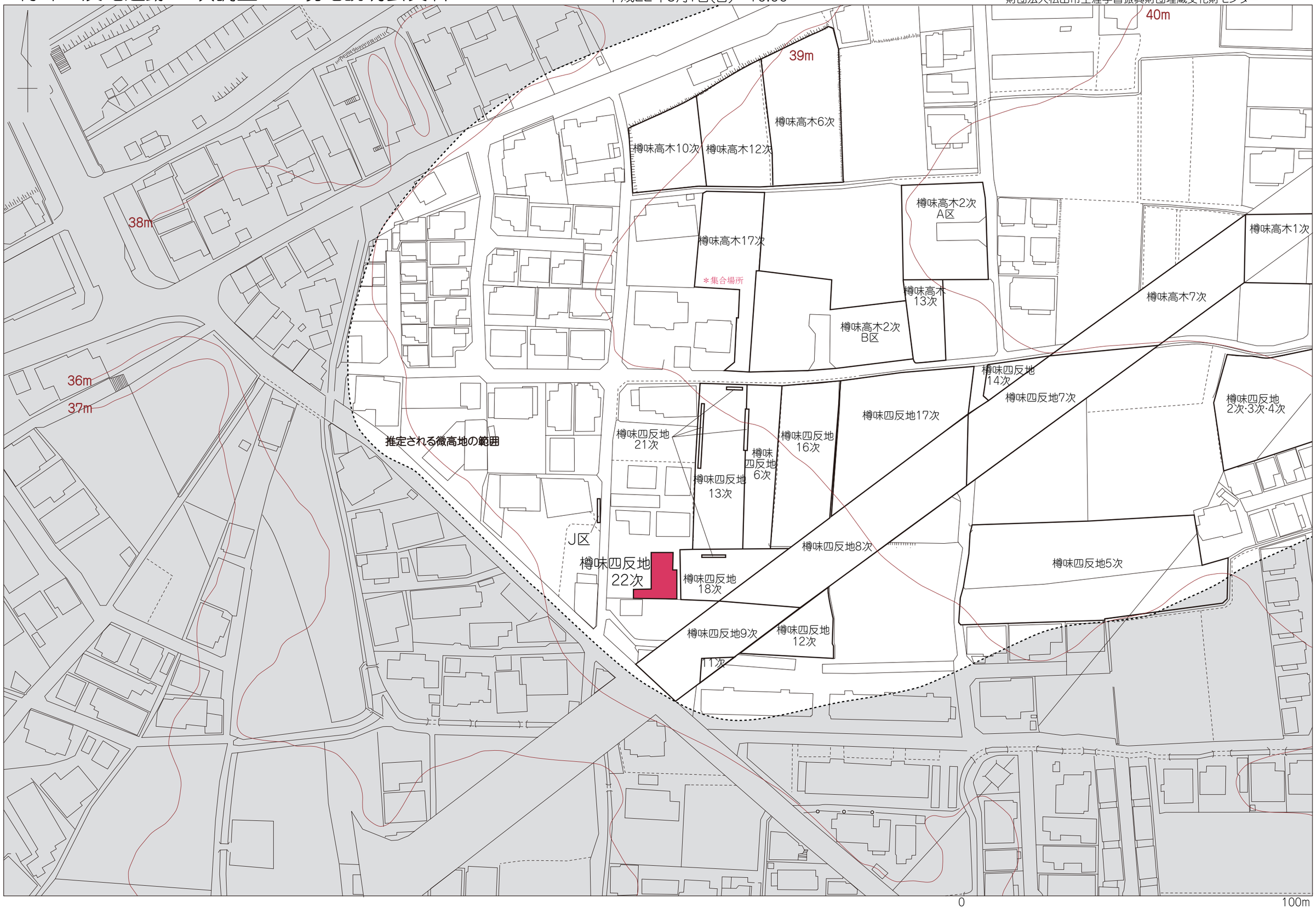
松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター



微高地(西半部)における主な発掘調査地点

樽味地区の遺跡の概要

石手川の中流域南岸沿いには、東西８００ｍ、南北２００ｍの微高地が広がっています。この微高地上では、これまでに松山市や愛媛大学等による埋蔵文化財の調査がおこなわれてきました。この調査の多くは、開発工事に先立って行われる記録保存を目的とした発掘調査ですが、松山市では、平成１５年度以降、学術目的の「樽味地区重要遺跡確認調査」を継続的に実施しています。

微高地上で発見された遺跡からは様々な考古学的情報が得られています。発掘調査は野外で実施する発掘作業と、室内で行う整理等作業があります。整理等作業では、発掘作業を通じて得られた記録書類（測量図や写真など）の整理と分析に加え、現地で出土した土器や石器などの遺物の基礎整理（洗浄・注記・接合、実測図の作成）と、分析・考察があります。この整理等作業を通じて調査の事実関係をまとめたものを「松山市文化財調査報告書」として公開しております。

報告書を参考にすると、石手川中流域南岸の微高地では、これまでに５遺跡５０地点以上の記録保存を目的とした発掘調査が実施され、データの蓄積がおこなわれてきました。このデータからは、微高地上に初めて遺跡（遺構と遺物で構成される）が出現するのは、今からおよそ３，０００年位前であることが明らかとなっています。以下、時代毎に主な遺跡の概要についてまとめます。

［１］ 縄文時代（晩期）：今からおよそ３，０００年位前

樽味立添遺跡３次からは、人々が食料などを蓄えるための穴蔵（貯蔵穴）群が見つか ったほか、東野森ノ木２次や同４次からは同時期の土器片が発見されています。微高地の中央北東寄りで貯蔵施設が確認されたことから、縄文人がこの地で「定住生活」をおくっていたことが明らかとなりました。

［２－①］ 弥生時代（前期）：今からおよそ２，５００年位前

樽味四反地遺跡７次や樽味立添遺跡３次からは区画を目的とした溝が見つかりました。樽味立添遺跡３次の溝には環壕の可能性が高いものがあります。最大で幅３．６ｍ、深さ１．２ｍを測る大規模なものです。この時期の樽味地区には大規模な環壕を設ける ことができる中核的な集落が成立していたと考えられます。

［２－②］ 弥生時代（中～後期）：今からおよそ２，０００年位前

樽味四反地遺跡５次や樽味高木遺跡２次からは竪穴建物（住居）が見つかりました。大型の住居は復元直径９．２ｍの円形プランで、５本の主柱で屋根を支える構造です。小型の住居（建物）は一辺が２．７ｍの方形プランの可能性のあるもので、この時期の 竪穴建物（住居）には、大型円形と小型方形とがみられます。さらに、樽味高木遺跡９次では１間×２間の掘立建物（高床倉庫）や隅丸方形状プランの穴倉（貯蔵穴）が発見されており、微高地の中央から西にかけては居住や貯蔵の施設が展開していたとみられます。

［２－③］ 弥生時代（後期後半～終末）：今からおよそ１，９００～１，７５０年位前

樽味四反地遺跡４次や樽味立添遺跡１次などからは竪穴建物（住居）が見つかっています。注目されるのは他地域との積極的な文化交流のあったことを示唆する稀少遺物がいくつも確認されていることです。樽味立添遺跡１次からは中国の新王朝時代の貨幣『貨泉』の完形品、樽味高木遺跡３次からは船を描いた絵画土器片、東野森ノ木遺跡２次の竪穴建物からは袋状鉄斧や鑿などの鉄器のほか、勾玉も見つかっています。なお、微高地から一段土地の低い南西側に所在する東本遺跡４次からは中国製（舶載）の鏡片が見つかり、平野内でも特に有力な集落が樽味地区周辺に存在していたと考えられます。

［３－①］ 古墳時代（前期初頭）：今からおよそ１，７５０年位前 ★

微高地の南西端付近に立地する樽味四反地遺跡６次・８次・１３次から、とても大きな掘立柱建物が合わせて３棟見つかりました。いずれも通常の大きさをはるかに上回る規模（床面積）で、柱筋の交わるところ全てに柱がある「総柱構造」の高床建物です。８次で見つかった最も立派な建物（超大型建物）は、床面積が１６０㎡を超え、建物周位には「庇（縁）」を伴います。さらに、建物中央には棟持柱があり、屋根を支える柱の大きさは直径が４０ｃｍにも達します。これらの諸特徴を総合すると、この建物は平野を統括していた大首長の最重要施設と考えられ、この樽味地区には西瀬戸内における権力者の出現契機や過程を含め、当時の社会構造を考える上で、とりわけ重要な遺跡が存在していました。調査及び研究の課題は、当時の景観や関連施設の広がりを明らかにするとともに、遺跡が成立した歴史的背景などを具体的に検証することです。

［３－②］ 古墳時代（中期前半）：今からおよそ１，６００～１，５５０年位前

微高地の中央部と南西部には渡来人の住まいが見つかっています。樽味四反地遺跡９次からは、６．５×５．４ｍの長方形プランの竪穴建物（住居）が見つかっています。壁立ち構造で、住居内には間仕切り溝が伴います。住居北壁の中央には造り付けの竈がみられました。土師器には甕･壺･高坏のほか甑がみられ、外面に「格子叩き」を施した、いわゆる軟質土器が伴っていました。

［３－③］ 古墳時代（中～後期）：今からおよそ１，５００年位前 ※

微高地の中央部から南西部に集落が広がっています。中央部の樽味高木遺跡９次では一辺５ｍ程度の中型住居と、一辺４ｍ程度の小型住居とが確認されています。今回の調査地の北東隣接地に所在する樽味四反地遺跡６次・１３次・２１次からは総数約５０棟の竪穴建物が確認されています。遺構密度はきわめて高く、微高地南西部の高台が主な居住域のひとつであったと考えられます。

［４］ 奈良時代 ～平安時代：今からおよそ１，３００～９００年位前

微高地の中央南端に所在する樽味四反地遺跡５次では、自然流路（川）から須恵質の硯が４個体以上見つかり、周辺の高台には文字を書くことのできる古代役人の勤めた役所施設が展開していたとみられます。

［５］ 鎌倉時代 ～室町時代：今からおよそ８００～４００年位前

微高地の各地に遺跡が確認されています。なかでも愛媛大学農学部キャンパス内の樽味遺跡２次で確認された１４～１６世紀の集落関連遺構は注目されます。このほか、東野森ノ木遺跡１次からはほぼ完形品の白磁の四耳壺が埋納されたまま見つかりました。希少価値の高い貿易陶磁器の完形品が確認されたことで、微高地の北東部には階層性の高い集団が存在していたと考えられます。

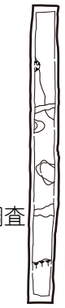
［６］ 江戸時代：今からおよそ４００～１３０年位前

微高地の各地に遺跡が確認されています。平成７年度に調査された樽味高木遺跡４次からは、寛永通宝１０枚がワラで束ねられた状態で見つかり、地鎮に関わる祭祀行為が行われた可能性が考えられ、当時の精神性をうかがい知る手がかりが得られています。

■このように、主に樽味地区に広がる微高地には、いにしえの人々の生活を営んだ跡（遺跡）が良好な形で残されています。発掘調査及び研究の進展により、この地の人々は縄文時代晩期からすでに定住生活を始めていたことが確認され、石手川中流域南岸の微高地が居住域として活用されていたことが明らかになってきました。調査成果で特筆されるのは、平成１０年度以降、微高地南西部において古墳時代はじめ頃の大型建物（床面積１００㎡以上）が相次いで発見されたことです。これにより、大型建物が成立した古墳時代はじめ頃、樽味地区には大首長に関係する最重要建造物の存在していたことが明らかとなり、古墳時代開始期における首長層の成立過程を考える上で、全国的に「まつやま」が注目されるようになりました。

樽味四反地遺跡２２次調査

●調査期間：平成２２年１月１８日～３月末日予定
●調査場所：松山市樽味四丁目２２９番１の一部
●調査面積：約１００㎡
●調査担当：松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団　埋蔵文化財センター



樽味地区
重要遺跡確認調査
（J区）

【1．はじめに】

・今回は学術目的（重要遺跡の範囲内容確認）の調査です。
・調査区は過去に実施した１８次調査、重要遺跡確認調査Ｇ区（平成１７年度）とＩ区（平成２１年度）などを繋いで設定しています。
・埋蔵文化財は現地表下３０㎝で確認され、主に古墳時代中期以降の生活関連遺構が濃密に分布している状況が明らかになりました。
・以下に、主な遺構や遺物を紹介します。

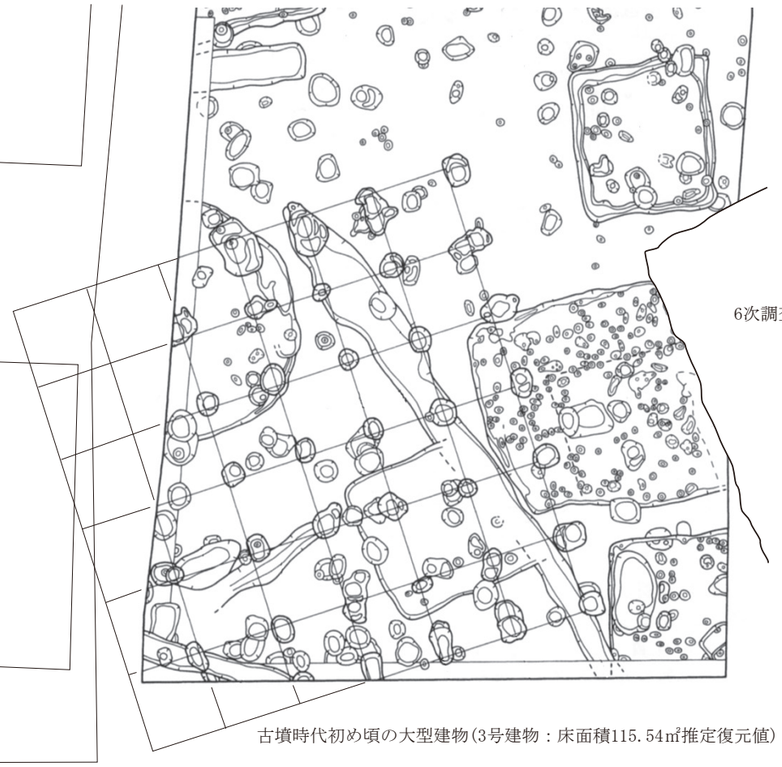
【2．確認した主な遺構】

Ａ．掘立柱建物…１棟（２間×２間、床面積およそ１２㎡）
Ｂ．竪穴建物（住居）①～④…４棟（長方形プランと方形プランか）
Ｃ．溝…１条（東西方向を指向）
Ｄ．柱穴…４０基ほど
※遺構変遷（重複関係）：Ａ（掘立柱建物）→Ｂ（竪穴建物①・④）
→Ｂ（竪穴建物②）→Ｂ（竪穴建物③）→Ｃ（溝）

【3．発見した主な遺物】

１）弥生土器（前期の壺片／木葉文、中期の高坏片／矢羽根透かし、後期の甕片・壺片など）
２）石器（扁平片刃石斧／加工用、緑色片岩製←在地石材、砥石／鉄器用、竪穴建物①）
３）土師器（古墳時代中～後期の甕片、高坏片など）、軟質土器（長胴甕の胴部片か）
４）須恵器（古墳時代中～後期の坏蓋・坏身・高坏片・壺片、奈良時代の須恵器片）

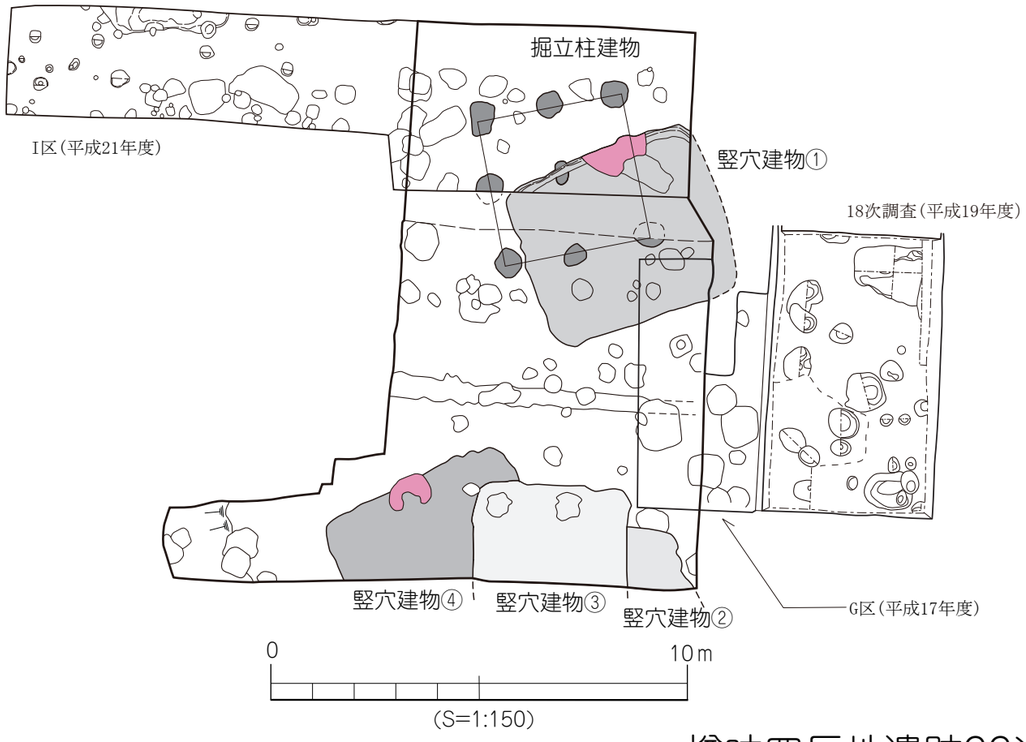
13次調査（平成17年度）



6次調査（平成10年度）

古墳時代初め頃の大型建物（3号建物：床面積115.54㎡推定復元値）

13次･21次の記録写真（南上方より）

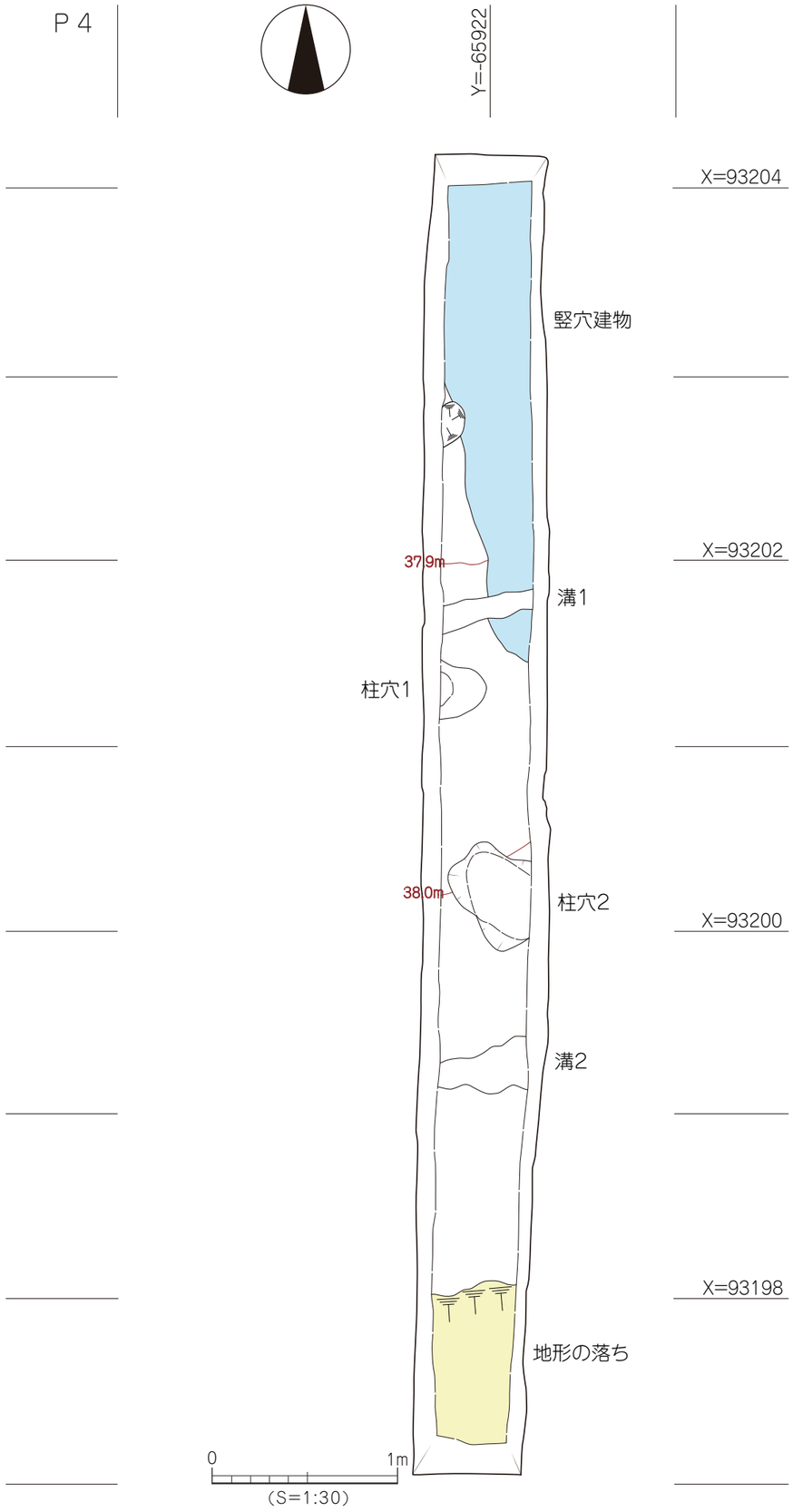


竪穴建物③の礫群（西より）

【4．調査のまとめ】

○古墳時代初め頃の大型建物群に伴うあらたな遺構を確認するには至りませんでした。このことから、大型建物群の西域の一角は当時、広場的な役割を果たしていたと考えられます。
○調査地が本格的に土地利用されるのが古墳時代中～後期頃で、小規模な竪穴建物や掘立柱建物などの集落関連遺構が展開していました。重複関係から遺構の変遷を理解することが可能になりました。
○竪穴建物には竈が伴うものがあり、蒸し器に使われた「甑（こしき）」と呼ばれる“うつわ”の破片も確認できたことから、新しい炊飯施設とうつわが集落内に確実に受容されていたことを追認できました。
○掘立柱建物からは古墳時代中期後半頃の遺物が発見されました。時期や規模等から、この建物は食糧などを保管する倉庫の可能性があります。これは当時の集落景観を考える上で興味深いデータに位置付けられ、既往の調査データの解析に大いに参考となるものです。

樽味四反地遺跡22次調査の成果



Ｊ区全景（南より）

Ｊ区竪穴建物（北より）

樽味地区重要遺跡確認調査（Ｊ区）

●調査期間：平成２２年２月２日～３月末日予定
●調査場所：松山市樽味四丁目３３２番１の一部
●調査面積：約３．５㎡
●調査担当：松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団　埋蔵文化財センター

【調査のまとめ】

○Ｊ区では、地表下３０cmから埋蔵文化財が確認され、遺跡が微高地南西端付近にまで広がっていることが明らかになりました。

○微高地南西端に柱穴２基や小溝のほか、古墳時代後期とみられる竪穴建物（住居）の一角が確認されました。竪穴建物は方形プランの可能性が考えられ、古墳時代後期頃には居住域がさらに西へ広がっていたことがあらたにわかりました。

○注目された古墳時代初め頃の大型建物に伴う境界の溝を確認するには至りませんでした。このことから、境界の溝はゆるやかに湾曲して、南西方向に続く可能性が高まりました。微高地南西域に展開する建物群の周辺景観については、いまだ未解明な部分も残されています。今後も既往の調査データの実証的な総合検証を進めてまいります。

MEMO

樽味地区重要遺跡確認調査（Ｊ区）の成果